

【6】実践場面

〔1〕授業づくりの基本的な考え方

我々は、次のような観点でコミュニケーションに視点をあてた授業づくりに取り組んだ。

(1) 単元・題材の設定とその配置の工夫

a 単元・題材の設定の観点

社会参加を控えた高等部の生徒たちではあるが、社会や人との関わり方が未熟で消極的なため、社会参加についていろいろな課題を抱えている。したがって、とりあげられる単元や題材は、社会や人との関わりを意識したものが多くなるが、特に次のような観点で単元や題材を設定した。

○社会参加するにあたり、生徒たちが直面するであろう生活上の問題を単元や題材としてとりあげる

・例 買い物学習

(主な指導内容…金銭の扱い、日常生活用品の購入、銀行の利用等)

○社会や人と関わる経験を増やし、「問題解決する力」や「いろいろな相手とコミュニケーションする力」を高めるために、校外での学習を有効に取り入れていく。

・例 公共機関の利用(図書館、福祉事務所等) 奉仕活動(地域の施設への奉仕)

b 単元・題材の配置の工夫

単元や題材を通して学習した内容が生徒に定着するよう、単元・題材の配置を工夫する。そのために、年間指導計画、学習指導計画を作成し、検討する。

○年間指導計画

学習したことが一人ひとりに定着し、生活の中で生かせるようにするために、単元や題材は精選し年間通して継続実践する。

・例 性教育 わたしたちの障害

○学習指導計画

生活一般と課題学習の学習内容を関連させることにより、具体的な実践方法と必要な知識の両面からの指導を行い、確実に定着することをねらう。そのために、生活一般と課題学習それぞれの指導計画を「学習指導計画」として毎月作成し、単元や題材の関連を検討する。

〈学習指導計画作成上の留意点〉

- ・生活一般の題材は年間指導計画による。
- ・生徒個々が取り組む課題学習の内容が生活一般の学習にどのように関連しているのかを明確にする。(次ページ「学習指導計画」中の←は生活一般に対して事前の関わり、→は事後の関わりを示している。)生徒の実態に応じて、生徒個別の課題により直接的にアプローチできる内容を取り入れてもよい。
- ・グループ学習は、生徒の課題が十分に考慮されながら継続実践される内容である。
- ・課題学習のグループ編成が生徒の課題に即してより適正である。

(2) 指導者の関わり方

a. 指導者の基本的な構え

我々は、コミュニケーションの力を高めることをねらって、次のような関わり方が効果的だと考えた。

- 一人ひとりの活動場を保障し、すべての生徒が活動できるような配慮と工夫をする。
- 教師主導型の展開にならないように留意し、生徒の試行錯誤や発言を大切にす。
- 自己客観視の力を高めるために、指導者は生徒の反応を鏡のごとくそのまま返すことで、「自分の像」を目前に提示す。そして、生徒自身に「自分」がどうなのかを気づかせ認識させる。
- 全ての教科・領域の場面で、学習活動について振り返って反省する場を設定し、自分のどこがよくてどこが悪いのか、次はどうすればよいかを考えさせる。
- 生徒が話し手になる場合には、誰にでも分かるような表現を要求し、何を伝えたいか分からないのに、安易に分かった反応を示さない。時には、誰にでも伝わるような表現を提示して復唱させたり、実態に応じてパターン化した表現の指導も取り入れたりする。
- 生徒の発言や表情やサインや身ぶりを読み取って対応し、人と関わることの楽しさを学ばせる。
- 一人ひとりの発達課題、生育歴、家庭環境、言語による指示や発問の理解がどの程度であるかをよく把握しておく。それらをよくふまえ、発問や指示や手だてを吟味する。

b. 各実践場面での指導者の姿勢

上記の基本的な構えをうけ、各実践場面の特性や独自のねらいを考慮して、指導者の姿勢を次のように考えた。

〈生活一般〉

- 「お互いを認め合う雰囲気の中で、自分の思いや考えを表現できる授業」をねらって
 - ・お互いに認め合う雰囲気を作り、ある程度の方向性は示唆するが、決定は生徒にまかせる。活動するなかで、意図する方向へ修正していくように導いていきたい。
- 「社会生活を営むことを意識し、より具体的に実際的な活動の中で自分の課題が理解できるような授業」をねらって
 - ・具体的なルールや方法については事前に把握させた上で、危険が及んだり他に迷惑がかからない限り、教師主導にならないように指示や声かけを少なくし、生徒の試行錯誤を大切にして待つ姿勢をとりたい。

〈課題学習〉

- 「個々の課題そのものに直接的でも間接的でもアプローチできるような授業」をねらって。
 - ・個々の発達やつまづきを的確に把握した上で、社会参加に向けて最優先となる課題に着目して指導内容を焦点化する。

何のために、この学習に取り組んでいるのかを生徒一人ひとりに明確に意識させることができるように、学習の目的や個々の課題を提示することを授業展開の中に必ず盛り込みたい。

また、生活一般の実践を中心とした学習の中から、一人ひとりの課題を含むような内容を引き出して教材化する。学級での一斉学習と関連させることで、生徒への動機づけは比較的容易となり目的意識を持って取り組むことができると考えられる。

この時我々は、生活一般と課題学習の年間指導計画をよく照らし合わせて吟味し、継続的な指導が可能となるように配慮しなければならない。

〈職業科〉

- 「いろいろな作業を通して、働く生活を営む上で一人ひとりが抱えている課題を克服し、自信を持って進んで作業に取り組める態度や技能の育成をめざした授業」をねらって
 - ・「できないこと」が「できるようになった」という成就感を持たせることができるように、作業内容の質と量を常に吟味し、自分なりに見通しを持って時間一杯活動できるような教材を準備する。
 - ・必要以上の声かけや賞賛は、生徒の集中力を欠く要因となるので避ける。
 - ・失敗した時を指導の場として捉えて、「何が悪かったのか。どうすればよいのか。」を気づかせるように導き、自分を省みる場を意図的に設定する。自分の課題を認識して克服しようとする意欲や方法を学び取らせたい。
 - ・他とコミュニケーションを持たねばならないような場面を意図的に設定していく工夫をする。
- 「社会との関わりを意識したり、作業の流れをつかんで自分の役割を認識して、見通しを持って取り組めたりするような授業」をねらって
 - ・作業工程やおおまかな流れを生徒によくわかるように提示し、作業全体への見通しを持たせる。
 - ・社会との関わり（製品であること、流通の仕組み、納期、納品等）を作業工程の中に盛り込み、社会での「働く場」を常に意識させたり、自分の分担に責任を持たせる。
 - ・一人完結型や流れ作業や分業等、いろいろな作業形態を経験させるが、どの形態の場合でも目の前の作業をこなせばよいのではなく、全体の流れを見て、段取りをしながら作業していくことを要求する。

〈日常生活の指導〉

- ・あいさつ、ことば遣い、身だしなみなどの礼儀作法や関わり方の基本の指導を心がける。
- ・家庭との連携を図りつつ、一人ひとりの生徒の行動をよく観察し、指導内容の定着を図るための声かけや、確認、個別の指導を行う。
- ・生徒の行動や様子から問題となるものを取り上げたり、良い場面を紹介したりするなど、学習活動として生かすことのできる内容を模索する。
- ・生徒との対話を持つことに心がけ、一人ひとりの思いを引き出したり、悩みをカウンセリングするような指導を大切にする。
- ・児童生徒会活動への積極的な参加、余暇の指導、生徒間の交流を図るなどの指導を休憩時間を利用して行う。

(3) 個を生かす指導の工夫

a. 生徒一人ひとりを生かす指導の基本的な考え方

- 生徒の実態に応じて、個別指導を随時取り入れる。
- 教材には、同一教材複数課題が可能なものを選択し、一斉指導の中でも個別の配慮を行う。
- 教科や領域の性質により、指導者が意図的にグループ編成を行い、一人ひとりの課題を明確にした上で取り組む場合もある。
- 個や集団に応じて、取り組みやすく学習効果が高まるような教材・教具の工夫をする。
- 「コミュニケーション指導内容表」を個別化したものにし、一人ひとりの指導目標を明確にした上で実際の指導にあたるようにする。また、指導目標を意識して指導にあたる。

b. 「コミュニケーション指導内容表」における個を生かす指導の工夫

我々は、生徒一人ひとりへのアプローチの視点や方法を明確にし、共通理解して指導にあたることをねらって、本校高等部独自の指導内容表を作成した。

181ページに、本年度実際に活用した指導内容表の一部を抜粋して紹介する。

試案の段階なのでこれだけで万全だとはいえないが、指導の手がかりや指導法の評価として活用した。指導内容表作成の観点と活用方法は次の通りである。

- ◎この指導目標を切り口として指導にあたれば、コミュニケーションの力を高め、確実にしていく足がかりとなるのではないかという、一人ひとりの生徒への指導仮説として考える。
- 指導項目として「要求、あいさつ、応答、訴え、報告、質問、伝言、説明、意見・感想、人や社会との関わり」を挙げ、実践場面を想定してさらに細かい指導項目を設定している。
- 生徒のコミュニケーションの実態を基準表によりチェックして0～Ⅵ段階に位置づけ、実態に応じた指導内容や指導方法のもとに、一人ひとりの指導目標をたてる。
- コミュニケーションの段階が同じ段階に所属する生徒でも、一人ひとりの実態やねらいは異なる。一人ひとりの指導目標を表の中に文章表現で書き込むことにより、個に応じて活用しやすいものとする。
- どの段階の生徒にも、全ての指導項目の力をつけることは望ましいとはいえるが、あれもこれもとねらいすぎて指導が散漫になることがないようにしたい。指導の切り口として、各段階ごとに一番望まれる指導内容を選択し、重点的に指導することで効果の高まりをねらう。
- 生徒を段階に位置付け、指導内容を限定したり画一化しようとする目的のものではない。
- 指導内容表の中に、各段階で最も必要で優先されると考えた指導内容を、←→で表す。
- コミュニケーションの評価基準には4つの項目があり、一人の生徒のなかでも項目によっては所属する段階が異なる場合がある。その時には「社会参加を意識して、高等部のこの時期に身につけておくことが必要だ」とされる項目を優先し、その段階での指導から着手していく。

次ページに、コミュニケーションの段階に応じた基本方針を挙げている。これは、指導者が実態に応じて適切かつ効果的な対応をすることが望ましい、という考えのもとに考案したものである。

